

カイザリヤの地において、アガポによりエルサレム訪問には困難が伴うと預言され、周囲はパウロに踏みとどまりを勧めました。しかし、パウロは死ぬことさえ辞さない覚悟を述べ、周囲も沈黙したのでした。



1. エルサレムに着き (15～18節)

- ①エルサレムに (15)「**こうして数日たつと、私たちは旅仕度をして、エルサレムに上った。**」

こうしてパウロ一行は、エルサレムへの道をとることになりました。ここからは陸路をとっての旅です。その距離は40キロぐらいでしょうか。海路と違い、荷物は背負うか、動物に頼るしかありません。

- ②マナソンの所に (16)「**カイザリヤの弟子たちも幾人か私たちに同行して、古くからの弟子であるキプロス人マナソンのところに案内してくれた。私たちはそこに泊まることになっていたのである。**」

心配したカイザリヤの弟子たちも同行しました。彼らは案内人の役割も担い、エルサレムの滞在先へと導いたのでした。なんといっても、パウロの一行には、異邦人クリスチャンも混じっていましたから、それを理解してくれる所が必要でした。エルサレム教会の古くからのクリスチャンで、キプロス出身マナソンの家はうってつけでした。

- ③兄弟達の歓迎 (17～18)「**エルサレムに着くと、兄弟たちは喜んで私たちを迎えてくれた。次の日、パウロは私たちを連れて、ヤコブを訪問した。そこに長老たちがみな集まっていた。**」

さて、一行が緊張しながら、エルサレムに着くと、教会の兄弟たちが歓迎してくれました。とりあえず、ほっとしたことでしょう。その翌日には、そのクリスチャン達は、パウロ一行をエルサレム教会の牧師であるヤコブのところへと案内してくれました。エルサレム会議(15章)で執り成しをした、主イエスの兄弟です。そこには、長老達が集まりました。クリスチャンは数万になっていましたから、長老達も相当数いたことでしょう。また、この時には、ペテロやヨハネは別の地に移っていたと思われます。

2. パウロとエルサレムの長老達 (19～22節)

- ①パウロの立証 (19)「**彼らにあいさつしてから、パウロは彼の奉仕を通して神が異邦人の間でなされたことを、一つ一つ話し出した。**」

エルサレム教会のヤコブ牧師や長老達にあいさつをしてから、パウロは第三回伝道旅行を通して与えられた宣教報告を行いました。特に主が異邦人達になされた恵みについては強調して語りました。そして、具体的事例を一つ一つ挙げながら、語ったのでした。

- ②兄弟達の助言 (20)「**彼らはそれを聞いて神をほめたたえ、パウロにこう言った『兄弟よ。ご承知のように、ユダヤ人の中で信仰に入っている者は幾万となくありますが、みな律法に熱心な人たち**

です。』

エルサレム教会の人々はその報告と立証を聞いて、神の御名をほめたたえました。その上で、彼らはパウロに対して助言をするのでした。それは、特にユダヤ人でクリスチャンになった多くの兄弟は、キリストによって救われた者たちであることはもちろんだが、律法も熱心に守っている人達だと注意喚起したのです。

- ③パウロについて伝わっている事 (21~22) 「ところで、彼らが聞かされていることは、あなたは異邦人の中にいるすべてのユダヤ人に、子どもに割礼を施すな、慣習に従って歩むな、と言って、モーセにそむくように教えているということなのです。それで、どうしましょうか。あなたがたが来たことは、必ず彼らの耳に入るでしょう。」

一方で、彼らユダヤ人クリスチャン達は、パウロについて間違っただけで聞いていることがあるというのです。つまり、パウロ達が異邦人伝道をするなかで、その中にいるユダヤ人クリスチャンに、子供に割礼を施すな、慣習に従って歩むなど言って、モーセの律法に背くことを教えていると聞いているというのです。パウロは異邦人でクリスチャンになった人に割礼を求めませんでした。しかし、テモテに割礼を受けるようにと語っていましたから、その伝聞は間違いでした。しかし、長老達の危惧するところは、彼らが誤った情報でパウロに接して衝突することでした。

3. 四人の誓願者たちとともに (23~26 節)

- ①共に身を清め (23~24) 「ですから、私たちの言うとおりにしてください。私たちの中に誓願を立てている者が四人います。この人たちを連れて、あなたも彼らと一しょに身を清め、彼らが頭をそる費用を出してやりなさい。そうすれば、あなたについて聞かされていることは根も葉もないことで、あなたも律法を守って正しく歩んでいることが、みなにわかるでしょう。」

彼らの勧めは、ナジル人の誓願をする四人を連れて、彼らと一緒に身を清め、彼らが頭をそる費用を出すということでした。そうすれば、噂は根も葉もなく、パウロの律法観も理解されるだろうということでした。

- ②異邦人の信者には (25) 「信仰に入った異邦人に関しては、偶像の神に供えた肉と、血と、絞め殺した物と、不品行とを避けるべきであると決定しましたので、私たちはすでに手紙を書きました。」
長老達は一方では、エルサレム会議で決められたように、異邦人クリスチャンに対し、律法の要求をしないよう伝えることを約束しました。
- ③パウロも共に (26) 「そこで、パウロはその人たちを引き連れ、翌日、ともに身を清めて宮に入り、清めの期間が終わって、ひとりひとりのために供え物をささげる日時を告げた。」

パウロは長老たちの勧めを受け入れ、誓願を立てている人々と共に行き、供え物をささげる日を公表したのでした。

《結論》 パウロは理念に基づいて生き、行動した人でした。たとえば、ローマ人への手紙には罪人である人間の救いは神の恵みであることが綿密に論ぜられています。また、ガラテヤ人への手紙には、律法を行うのではなく、福音を信ずる信仰によって救われること、異邦人の救いの確かさが論ぜられていて、これらはパウロの宣教の根本にあります。

さて、パウロの三回の伝道旅行は当時の地中海世界を巡ってのものでした。それは各地に散るユダヤ人への伝道でもありましたが、多くは異邦人への伝道でありました。そして、異邦人たちが救われて、聖霊が大いなる働きをしてくださることも、見てきました。それはエルサレム会議において、全キリスト教会においても確認されました。その会議では、異邦人クリスチャンに対して、ユダヤ人が行ってきた割礼を強いたり、律法による慣習を細かに守らせたりすることから解放することも認められました。

しかし、エルサレム教会はそのほとんどがユダヤ人クリスチャンで構成されていました。そして、彼らはその時代においても、割礼を行い、ユダヤ人の慣習を継続していました。エルサレム教会の牧師であるヤコブは、エルサレム会議において異邦人を受け入れることに大きな役割を果たしました。一方、大きなエルサレム教会の牧師として、旧約時代から行ってきた割礼や習慣について行うことを認めてきたと考えられます。

今ここで、パウロがエルサレムにやってきて、ヤコブ牧師や長老たちと相対して、直面した問題は、ユダヤ人クリスチャンたちが、パウロがモーセの教えに背いているのではないかという問題提起でありました。長老達はそうした誤解を解くために、知恵を授けました。つまり、ナジル人の誓願をする人達は、30日間、酒を断ち、死体から遠ざかり、不浄な食物を避け、頭にかみそりを当てないのです。30日間たつと、神殿の前で頭をそり、和解のいけにえに火にくべて、自由の身となるのです。こうした儀式にパウロも加わり、頭をそる費用はパウロが出すという勧めでありました。パウロはそれを行いました。

パウロは律法から自由になっていました。その理念からいえばこうした儀式からも自由でした。しかし、彼は述べます。「私は誰に対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷となりました。ユダヤ人にはユダヤ人のようになりました。それはユダヤ人を獲得するためです。…律法を持たない人々に対しては、律法を持たない者のようになりました。弱い人々を獲得するためです。」(コリント第一9:19-22)

私たちのクリスチャン生活においても、異教に基づく習慣の問題などが生じます。この国に生きるクリスチャンのテーマです。すぐに妥協するのではなく、そのような時は、信仰によって判断します。もちろん、愛を教えられている私達ですから、偶像礼拝には気をつけながら、さまざまな配慮をしつつ、対応します。それには、いつも十字架と復活の主を見上げ、祈りながら考えます。これはキリストの愛に根差しているだろうかと問いながら、進んでいきたいのです。パウロ先生も、ヤコブ牧師共々、こうした現実と向き合ったのです。私達も教えられていきましょう。